

第二話 歌は心の帰り船（かえり船）

演歌は、なんとも不思議な代物だ。「愛」だ、「恋」だに始まって、「泣く」だの、「別れ」だの、「面影」だのと、およそセンチメンタル（感傷的）な言葉をこれでもかこれでもかと並べ立てる。ひとつ掲げれば

啼くな小鳩よ 心の妻よ

なまじ啼かれりや 未練がからむ

たとえ別りようと 互いの胸に

抱いていようよ おもかげを

いわずと知れた「泣くな小鳩よ」、岡晴夫で一世を風靡した大流行歌である。だが、こんな陳腐な、心の上っ面をなぞるセンチメンタリズム（感傷の世界）が、どうして私たちの心を捉えるのだろうか。もちろん、こうした演歌がなにか空々しくて、とても唄う気になぞなれないときもある。人によって異なるだろうけれど、私ごとで言えば、「遠きかの人」

や今は泉下の父・母と痛哭の別れをしたとき、つまりはたとえようもなくうちひしがれたときがそうである。それがしかし、しばしのとぎ経ると、いつのまにやら、またぞる唄って胸にしびれるようになるから、摩訶不思議。まこと演歌とは、つれづれの心にじわりと沁みくる媚薬である。

センチメンタリズムは、思春期とともにやってくる。思春期は、人に対する関わり方やものの見方を一変させ、それまでとはまったく異なる人生を出発させる。第二の誕生と言われるゆえんである。異性愛が生まれ、愛して苦しみ、別れて悲しむ。そして、人の世のなんたるかが分かるようになる。どうして、感じやすくならずにいられようか。たくさんの少年少女が、“愛”を知って、“恋”に憧れ、“苦悩”を知って、“悲哀”にうたれる。こうして、演歌の心、センチメンタリズムは、人が人らしく生まれ変わった心の中に、一つのふるさととして産まれ落ちる。

しかし、人は理性の存在である。やがて淡き感傷などは幼稚未熟の証あかしとされ、他のもろもろの衝動やコンプレックスとともに心の表層（意識の世界）から放逐されて、心の深層（無意識の世界）に押し込められる。だが、ふるさとはふるさと。そこがどんなに貧しかろうと、どれほど遠かろうと、傷つき、悲しむとき、あるいは悩み、苦しむとき、人は心のどこかで、心安まるふるさとに帰りたいと思うだろう。

懐かしい心のふるさと、センチメンタリズム。ちょうど、私たちがふるさとを懐かしむの

と同じように、人はいつでもセンチメンタリズムを懐かしんでいる。ふるさとへ帰りたいたい、このノスタルジー（郷愁）を刺激し、いつしかふるさとへの渡し船に乗せるのが、甘  
悲しい歌と調べ、これがすなわち、演歌である。

\* 波の背の背に 揺られて揺れて

月の潮路の かえり船

霞む故国よ 小島の沖じゃ

夢もわびしく よみがえる

\* 捨てた未練が 未練となつて

今も昔の 切なさよ

睨合わせりや 睨にしみる

霧の波止場の ドラの音

戦争被害を体験した世代なら、誰でも知っている「かえり船」。これも「古典的」大演歌である。しかし、帰りゆく先はどこなのか。故国に戻るのか、あるいは故国を去つて別れゆくのか、この歌詞だけでは決めかねる。だが、唄ってみれば、温かい母の胸乳に揺すられるようなそのメロディに、誰もがすぐに分かるだろう。揺られて揺れて行く先が、まごうかた

なく、「ふるさと」であることを。ちなみに、唄は次のように続いていく。

熱いなみだも 故国に着けば

うれし涙と 変わるだろ

鷗ゆくなら 男のこころ

せめてあの娘に 伝えてよ

言わずもがなのことであるが、「あの娘 はもちろん、熱き心のふるさとである。

中学生の頃から唄い続ける「かえり船」。唄い続けて年経ることに、ふるさとをもたないこの私に、「ふるさと」恋しの思いをつのる。まさしく演歌は、心のふるさと「センチメンタリズム」への帰り船である。